

Dorothy Sayers の場合

柳 沼 重 剛

1

Dorothy Sayers (1893-1957) の場合とは、Dorothy Sayers のでない場合を念頭においての言いかたで、具体的には C. Day-Lewis (1904-72) と J. I. M. Stewart (1906-) のことを私は思っている。この三人はいずれも、いわゆる serious literature の分野で盛名を馳せたが、同時に探偵小説作家として人気の高い人たちである。ところが、Dorothy Sayers の場合は、他の二人と比べてどこか違っていそうに思える。考えるまでもなく調べてみるまでもなく違っていることがはっきりしている点もすでにあって、例えばこの三人の中で彼女一人が、探偵小説を書く時も本名で書いた。あとの二人は、C. Day-Lewis が Nicholas Blake, J. I. M. Stewart が Michael Innes, というペン・ネームで探偵小説を書いた。これが第一。次に、他の二人が、一方は詩人、一方は学者として旺盛な活動をつづけつつ、同時に探偵小説を書いたのに対して、Dorothy Sayers が探偵小説を書いたのは、彼女の64年の生涯のうち30歳から44歳までの間に限られていて、しかもその間彼女は探偵小説以外の仕事はしていない、というのが際立った違いである。この2点を加算するとどうなるか。C. Day-Lewis と J. I. M. Stewart は、小説を書いているのは Nicholas Blake であり Michael Innes であって俺ではないと言っているわけで、しかもそれが全生涯に及んでいるから、この二人にとってはそれぞれ、詩人、学者が本業で、探偵小説は副業だったことになる。それに対して Dorothy Sayers の場合は、Oxford 大学卒業後しばらくは詩人を志し^{*}、30歳から44歳までは探偵小説作家、それ以後約10年間は宗教劇の作家、そして晩年の10年は『神曲』と『ロランの歌』の翻訳家というように生涯が明確に区切られていて、それぞれの時期においてこれらの仕事はみな彼女の本業だったということになり、ここに「Dorothy Sayers の場合」を考えるきっかけがある。そしてこのき

かけに気がつくとき、また思い出すことがあって、このきっかけがますます確かなものに思えてくる。それは、Nicholas Blakeの探偵小説には詩人 C. Day-Lewisの面影を見ることはほとんどなく、つまり Day-Lewis と Nicholas Blake はまったく別人になっている、また Michael Innes の作品にしても、例えば *Hamlet, Revenge!* のような壮大な例外はあるにせよ、また、かの Appleby のせりふには literary allusion が少なくないにせよ、ほとんどの作品にあっては作者が学者であることを思わせるふしがとくに多いわけではなく、むしろ Michael Innes と J. I. M. Stewart が別人に見える方が当たり前なのに対して、Dorothy Sayers の場合は、例の Lord Peter Wimsey の、時にはきざっぽくて嫌みになるまでの学識と洒落っ気に、彼女の学識と憧れがそのままにじみ出ている、さすがと思わせるふしが随所にある、ということである。そして以上を総合すると、Dorothy Sayers の場合には、他の二人と比べて、探偵小説が彼女の生活に密着しているということになる。

2

ところでこれら三人のうち二人、Dorothy Sayers と J. I. M. Stewart に関しては、以上のこととはまた別な、しかし深く関連していると思われることがある。それは、Dorothy Sayers に関しては James Brabazon, *Dorothy L. Sayers* (London 1982) という伝記が書かれ、J. I. M. Stewart は *Myself and Michael Innes* (London 1987) という自伝を書いたということで、この二人の探偵小説を愛する私は、両方とも出版と同時に取り寄せて読んだのだが、問題はその後感にある。もっと正確に言うと、J. I. M. Stewart の自伝を読んでも、読む以前とまったく同じように Michael Innes の探偵小説を読むことができた、つまり自伝を読んだことが小説を楽しむことに何の影響も及ぼさなかったのに、Brabazon の伝記を読んだ後は、Dorothy Sayers の作品を以前のように手放して楽しむことができなくなった、ということである。このことに関しては、作品鑑賞に影響を及ぼさない伝記と影響を及ぼす伝記では、伝記の質がどう違うのか、あるいはなぜそういう違いが生じるのかを問題にすることもできるが、それ以上に、伝記が作品鑑賞に影響を及ぼす場合、影響を及ぼされる以前の

鑑賞と影響を及ぼされて以後の鑑賞と、どちらが作品鑑賞としてより望ましいだろうかを問題にすることができる。

影響を及ぼさなかった伝記については何も言うに及ばないと言っては愛想が悪すぎるだろうから一言触れておくと、J. I. M. Stewartの自伝は、'Myself and Michael Innes' という題名からしてすでに、Michael Innesは私ではないと宣言しているようなものだが、一方この題名は、学者Stewartと作家Innesがどう関係しあったかをみずから説明する文章であることも宣言しているはずで、大いに読者の期待をかきたてる。しかしこの自伝から読み取れることと言ったら、彼の英文学研究者としての輝かしい出発にもかかわらず、教授としての生活につねに満たされぬものを感じていて、それが学生時代から好きだった探偵小説の創作へと彼を向かわせたらしい（つまり著者自身ははっきりそう書いているわけではない）ということぐらいなもので、学者と作家が一人の人格の中でどう統合されていたのかの解明はなくてはぐらかされる。むしろ、教授として満たされぬ思いのまま暮らしをつづけたのはなぜだったのか、という問いの方がいっそう重要だという感想へと読者は誘われる。

3

BrabazonのSayers伝を読んでいない読者にも、Harriet VaneはSayers自身の投影、それに、こういう女性でありたいという彼女の願望を織り交ぜた人物で、Lord Peter Wimseyは彼女が結婚してもいいと思う種類の男性だろうぐらいの見当はつく。だから、こういう種明かしをされただけで彼女の探偵小説が読みにくくなるわけではない。それよりは、Harriet VaneやPeter Wimseyが創造され変化していく過程が説明され、それにSayersの生活のいちいちが絡みついている——その絡みかたは、まっすぐに単純なこともあれば、屈折し、あるいは裏返しになっていることもある——様を示されることによる。つまり、二十歳代の終わりから三十歳代の彼女の、才気あふれる知性的な女性、文学的野心に燃える女性、ただし肉体的には取り立てて魅力というほどの特徴をもってはいないと自覚している女性、しかし男の目には時々はっとするような魅力を発揮する女性、友人相手に妙にはしゃぐこともあるが、基本的には人とのつきあいが上手ではない女

性、たいていの場合には異性をはねつける態度を固持しているが、突然びっくりするほど気安く振る舞うこともある女性、としてのありようが、どういう Harriet Vane 像となって結ばれていくか、それを見るのがつらいと言っては大袈裟でも、それが探偵小説を読みにくくする原因なのである。もちろん、言わば彼女の理想の男性像である Lord Peter についても同じことが言える。言い換えれば、作中人物としての Harriet Vane や Peter Wimsey 自身はそれぞれにおもしろく魅力的だが、それを創造するに至るまでの、そして創造中の作者の生活を知るに及ぶと、読者は、Sayers の体臭を漂わせる生々しいどろどろした液を活字の上に塗られたような気分になって、頁をめくるのも億却になる、というわけである。もちろん、Harriet Vane がそのまま Dorothy ではなく、Peter Wimsey が彼女の周辺に実在した特定の誰かではないとは先刻承知でもである。

Brabazon の伝記が読者にとくに強烈に印象づけるのは、Sayers と俗称 Cournos という、彼女より12歳年長のユダヤ系ロシア人の、文学ジャーナリストとの交際で、結局は Sayers は妊娠するのだが、この時、子供を得ること（それでいて彼女はいわゆる子供好きではない）、肉体的快楽を得ること、結婚して性行為を重ねることによって、自分が社会的肉体的に通常な人間であることを自他に示すこと（この最後の一項は、知的で優越感を抱いているが、社交下手で肉体的には劣等感を抱いている女性の、屈折した心のなせるわざだろう）が sex だと心得ていた Dorothy、ふだんは男のことなら何でも分かっているんだという顔をして、sophistication を武器に男性とゲームをし、相手をちょっと引き寄せではすらしと身をかわずなどということを楽しんでいたつもりが、いざとなると 'to be overborne, like any Victorian fool' を激しく欲する自分を見いだして我ながら驚く Dorothy、そういういざとなった時、'the use of every dirty trick invented by civilization to avoid the natural results', 端的に言ってしまうと、'the taint of the rubber shop' を用いることを拒否し、子供を産むことによってのみ性は完成すると信じている Dorothy と、根っからのボヘミアンの「自由人」たる Cournos の相克が生じ、これによって Cournos は Dorothy を去ってアメリカに渡り、同じ Dorothy という名の文人女性と結婚し、後日書いた自伝の中でも Sayers との一件には一言も触れないのだが、Sayers のもとには Anthony という男の子がのこり、これが彼女の

以後の生活を著しく困難にした、ということで、Sayers自身はこれを‘practical Christianity’に関することで二人の見解が相違したのだとして胸の中で整理した。

以上のことはBrabazonの伝記の第9章に克明に記されているが、こういうことが明らかになったのはSayersがCourosに送った手紙一束が、彼の養子の手元に保存されているのをBrabazonが見る機会を得たからだ。彼はこれらの手紙を読んで‘a feeling of great relief’を感じたと言っていて、問題はここに集約される。Brabazonが‘great relief’を感じるのは、Sayersが万人同様、人間的な脆さ弱さをもっていたと知ったからだ。彼は言っているが、彼女の探偵小説の読者も、著者が人間的だということを知ってほっとするだろうか。

4

こういう私生活、あるいはここでは触れなかったたくさんのDorothy Sayersの個人生活の相が、彼女の作品中にHarriet Vaneという人物として造形されていく、それを見たり分析したりするのは面白くもあるし有益でもあり、おそらく研究の名に値する文章もそこから書けるだろう。しかしそうすることによって、博識とsophisticationと洒落の権化のようなWimseyを助けつつも、彼がああ言えばこう言い、こう言えばああ言いして丁々発止とわたりあうHarriet Vaneを無邪気に楽しむのがむずかしくなることは確かだ、彼女が登場するたびに、「本当は」とか、「Dorothy Sayers本人は」とかいうようなことが気になってくる。そして、気になってくるおかげで作品の味読が深められるのならいいが、ひたすら楽しむことを妨げられる以上、作品の理解が深まることにはならないだろう。つまりこのような研究は、たとえ面白かろうとも有益であろうとも、文学作品を文学作品として扱うのとは別の営みなのだということである。現に、このBrabazonの伝記の読者はDorothy Sayersの愛読者のうちの一握りの人たちだろうが、もしここに示されたSayers像をHarriet Vaneに重ね合わせて読むのが本当の読みかただとすると、愛読者のうちほんの一握りの人だけが本当の読みかたをすることになって、これは明らかにおかしい。いや、これが専門家というもので、一般読者とは違うのだ、という説もあ

るだろうが、それなら、作品を心から楽しまない専門家という妙な人間を自認することになりはしないか。ここから一足飛びに、およそ研究という態度で作品に接する時作品は作品でなくなる、という結論（これはかつて吉田健一が確信していたことだった）を出すのは差し控えるが、1982年に来日して筑波大学でも非常に刺激的な二つの講演をなさった、当時Oxford, Corpus Christiの学長だったDover先生が広島大学で、Byronのほかのものには目もくれず、彼の手紙だけに注目して、そこからギリシアについての言及を集めると、ByronのPhilhellenismなどというのは嘘っぱちで、彼はギリシアを愛してなんかいなかったと結論せざるを得ないと言われた（この講演は、筑波大学での講演などとともに、*The Greeks and their Legacy*, Oxford 1988という論集に収められている）のは、Byron観の修正を迫るだろうが、彼の詩の解釈にどう響くか。あるいはAndré Mauroisの有名な*Ariel*というShelley伝や、Robert Gravesの*Wife to Mr. Milton*を読むと、この二人はとてもまともにつきあえる相手ではなくて、こんなやつが書いた詩なんぞ死んでも読んでやるものかと、人によっては思うだろうが、だからと言ってShelleyやMiltonの作品が傷つくことはないだろう。作品を作品以外の材料によって説明しようと試みてある程度成功した例としては、Edmund Wilson、'A. H. Housman' ぐらいしか私は知らない（Pelican Bookの*Triple Thinkers*所収）。Housmanという人は、古典学者としては詩を詩として扱うことを頑なに拒否して文献学に徹し、それによって成功もし奇人扱いもされたが、詩人としても一世を風靡した。こういうHousmanを扱ったWilsonのエッセイの面白さは、彼がああいう学者だからこそああいう詩を書いたという説明をしている点にあるが、煎じつめれば、学者として切り捨てたものを詩で拾っていたと言っているにすぎない。それならHousmanにとっては学者が本業で、詩は副業あるいは手慰みだったことになり、探偵小説を書いたDay-LewisやJ. I. M.の場合と同様、あまり心配しないでもいいことになる。

注

*これはあくまでも、作家としての生活は、ということであって、この時期の彼女は生計を立てるのに苦労している。そのため英国やフランスで教師生活をしたり、広告代理店で今でいうコピー・ライターをしたり、最後には有名なOxfordの書店

Blackwell 社に勤めたりした。この Blackwell は長つづきして、探偵小説で名が売れ始めてもしばらくは勤めていた。

付 記

Dorothy Sayers の詩人という本業から探偵小説作家という本業への切り換えの動機は、J. I. M. の場合と同じである。ただし J. I. M. が作家になっても教授という本業を捨てずにすんだのは、教授という職業が本質的にもっている余裕のせいであろう（この説明を私は少なからぬ恐れを抱いて言っている。やはり文科系の教授は全世界的に暇なんだ、と言いたいような何人かの顔が目に浮かぶからである）。余裕だから食いつぶしやすいつつ同時に、いかに好きな道とはいえその余裕を仕事（それも著作という大仕事）で埋めてしまった J. I. M. の場合、それだけ学問の方は、「この道一筋」の人よりは歩みが遅くなったはずである。

彼女が44歳にして小説の筆を絶ってしまったのは、彼女自身これをつづけることに倦んだから（最後の作品 *Busman's Honeymoon* で Wimsey と Harriet を結婚させ Honeymoon に行かせて結末をつけた）であると同時に、前々から劇に強い関心を抱いていたからで、この移行はごく自然に行われた。探偵小説のおかげで財政的にゆとりのできた時、探偵小説以上に関心の強かった劇のために、探偵小説を捨てたのである。その分だけ探偵小説に本腰を入れていたとも言える。

以上のほか、Dorothy は Couros 以外に一二の男性と巡り会い、最後に出会った 'Mac' と結婚したがその彼にも先立たれたとか、その後 Anthony はどうなったかとか、それが小説家・劇作家としての彼女にどう影響したかとか、そういうことについては Brabason の伝記をなぞる以上のことを、今の私はやる能力もっていない。